

平成25年度 【 学園研究費助成金< B > 】研究成果報告書

学部名 文化情報学部

フリガナ ミヤシタ トアリ
氏名 宮下 十有

研究期間 平成25年度

研究課題名 映像メディアによる小学生の愛着の記録～椋山女学園附属小学校における建物の愛着の形成と共有の記録

研究組織

	氏名	学部	職位
研究代表者	宮下 十有	文化情報学部	講師
研究分担者	亀井 美穂子	文化情報学部	准教授
研究分担者			

1. 本研究開始の背景や目的等 (200字～300字程度で記述)

2012年度椋山女学園大学附属小学校において、移転する前の愛着のある小学校を中心に子どもたちによる小学校の写真を記録するワークショップを行い、その記録をパネルにして小学校および椋山歴史文化館に寄贈した。そして2013年4月より小学校は新校舎へ移転した。新校舎は、子どもたちにとってより学びやすい環境を作る工夫が多く取り入れられている。新校舎で、新たな学校生活を送る児童たちにとって、学びの場をどのようにとらえ、どの様に認識し、愛着をもつか、子どもたちと視線と新校舎との関係性を、子どもたちの眼差しからとらえ直すことで、子どもの空間認識と新校舎への適応とを観察する。校舎の移転による子どもたちの学校へのまなざしの変化を考察する。

2. 研究方法等 (300字程度で記述)

- 先行研究の調査と比較：前年度学園研 B での旧校舎の記録の成果をパネル提供、展示できるようにし論文にまとめたものと、本年度開催したワークショップの内容、成果を比較する。また、学びの場の「日常」と「非日常」の空間の意識の違いについて、宮下（代表者）が開催した愛知県児童総合センター、および豊田産業記念館でのワークショップの成果と小学校での成果との比較を行う。
- ワークショップの実施と評価：附属小学校のアフタースクール後の時間を利用して、有志によるワークショップ（2013年9月9日）を実施。カメラの扱い方と、地図作成、発表を通して情報共有した。愛着の形成の過程、日常空間の認識の観察、調査、分析を行う。
- 展示：ワークショップの成果物をパネル展示できるように加工し、活用提供できるようにする。小学校（A1 パネル6枚）、椋山歴史文化館（A3 ラミネート加工データ6枚）を制作する。また、来年度以降椋山女学園高等学校で開設される予定のメモリアルルームに提供できる PDF 形式でのデータ提供を可能にした。

3. 研究成果の概要 (600字～800字程度で記述)

今年度から小学校は新校舎での学びが始まった。初年度の児童の視線の大きな変化を記録するには、今ここからの取り組みが必須であると考え、本研究に取り組んだ。

本年から小学校の授業後の時間を学校で過ごす児童のためのアフタースクールが開設された。月曜開講のアフタースクール「デジタル・クリエーション」は、研究分担者の亀井美穂子准教授が中心となり、文化情報学部の学生有志が積極的に関わり活動している。大学と附属小学校との連携による実践、研究の場として、「デジタル・クリエーション」での時間を活用し、本研究のワークショップを行った。このクラスには、昨年度の写真ワークショップに参加した児童も参加しており、昨年度との比較も可能であると考えた。また「デジタル・クリエーション」で、小学生たちにとって顔なじみの大学生が介在する事で、アイス・ブレイクの時間を短縮し、短い時間でもより濃厚なワークショップが開催できた。

ワークショップに映像メディアの活用を取り入れることで、小学校の教育指導において近年重視されている「言語表現活動」において、支援できた。3Dカメラでの3D画像の閲覧、撮影操作体験、撮影した画像の印刷、学内マップ、文字による説明、言葉による発表など、様々なメディアを用いた表現活動が行われた。「建物」「学びの空間」「生活の空間」としての新校舎をどのように把握しているかが視覚的に明らかになった。子どもたちの語りから、自らがよく立ち寄る場所（音楽室、職員室の近く、屋上など）が記録の対象となっていることが観察された。建物の愛着がどのように形成されるかを観察する上でも貴重な資料となった。

制作した地図をパネル化し、小学校、歴史文化館に提供した。昨年度のパネルとの比較展示が可能である。また記録をとどめることで、新校舎の思い出が残り、児童自らが今後積み重ね、作り上げる自校史の有効な資料として提供することができた。

4. キーワード (本研究のキーワードを1以上8以内で記載)

①情報教育	②メディア教育	③児童の空間認知	④ワークショップ
⑤映像利用	⑥メディアコミュニケーション	⑦視覚情報	⑧自校史教育

5. 研究成果及び今後の展望 (公開した研究成果、今後の研究成果公開予定・方法等について記載すること。既に公開したものについては次の通り記載すること。著書は、著者名、書名、頁数、発行年月日、出版社名を記載。論文は、著者名、題名、掲載誌名、発行年、巻・号・頁を記載。学会発表は発表者名、発表標題、学会名、発表年月日を記載。著者名、発表者名が多い場合には主な者を記載し、他〇名等で省略可。発表数が多い場合には代表的なものの数件を記載。)

来年度の文化情報学部紀要において、本研究に関する論文を投稿する予定である。また、博物館、児童館でも同様のワークショップを開催した。3カ所で行われたワークショップを比較して、子どもとカメラのワークショップと空間認識の記録、愛着に関する学会発表を行う(2014年6月開催日本映像学会研究大会にて発表予定)。

子どもたちが制作した小学校の写真マップは、A1パネル、およびA3ラミネートにして、展示可能なものに加工した。これらは小学校、および眉山歴史文化館に提供する。

今後は、新校舎での学校生活を送る子どもたちに対して、今回の新校舎の好きな場所を記録するマップなどを制作した情報共有、来年度以降も継続的に児童の空間認識が観察できるよう、今回と同様のワークショップの企画、実施を検討している。